筑紫駅西口土地区画整理事業に伴う発掘調査1

名江天神社前遗跡

筑紫野市文化財調查報告書第78集

2004 筑紫野市教育委員会

筑紫駅西口土地区画整理事業に伴う発掘調査1

おなてんじんしゃまえる江天神社前遺跡

目次

本文目	次			
. 調査	ミに至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		•	2
. 位置	と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		•	4
調査	🖸 の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		•	5
1)SD0	001 • • • • • • • • • • • • • • • • • •		•	6
2)SD0	002 • • • • • • • • • • • • • • • • • •		•	10
,	001 • • • • • • • • • • • • • • • • • •			
	₹ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			
	各跡に残された痕跡に関する諸問題・・・・・・・・・・			
2) 道路	烙跡の歴史的評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・		•	21
挿図目為	次(Fig.)			
Fig.1 💆	発掘調査地点位置図(1/50,000) ・・・・・・・・・・		•	1
Fig.2	発掘調査地点周辺図(1/10,000) ・・・・・・・・・・		•	3
Fig.3	試掘坑(トレンチ)および調査区配置図 ・・・・・・・		•	5
Fig.4	基本土層模式図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・		•	6
	遺構配置図 (1/600)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			
	出土遺物実測図 (1/1)・・・・・・・・・・・・・・・・・			
	SF001 横断土層図(A ~ C)(1/30・40) ・・・・・・・・・			
	痕跡 C 類 - 実測図および土種分別図 (1/100)・・・・・			
	痕跡 C 類 - 実測図 (1/40) ・・・・・・・・・・・・・・			
	痕跡 D-2 類実測図(1/60) ・・・・・・・・・・・・・			
	痕跡 D-2 類分布範囲抽出図(1/60)・・・・・・・・・・			
	痕跡 H-3 類 (溝内杭列)実測図 (1/140)・・・・・・・・			
Fig.13 👖	痕跡 H-3 類(溝内杭列)復元想定図・・・・・・・・・・	• •	•	18
表目次	(Tab.)			
Tab.1	試掘実施面積一覧 (年度毎)・・・・・・・・・・・・・・・		•	2
写真目》	次(PL.)			
PL.1	・ 調査区全景(東方を望む)			
PL.2 上	SD001 (北側溝)と痕跡 H-3 類(溝内杭列)			
PL.2 下	区道路跡横断土層			
PL.3 上	SD001 (北側溝) 土層			
PL.3 下	SD002 (南側溝) 土層			
PL.4 上	痕跡 ℂ類 -			
PL.4 下	" 検出土壌			
PL.5 上	痕跡 D-2 類(凹凸痕跡)検出作業			
PL.5 下	" 検出状況[掘削前]			
PL.6 上	" [掘削後]			
PL.6 下	痕跡E類(起耕痕跡)			
PL.7 上				
PL.7 下	II .			
PL.8	出土遺物			

例言

- 1 . 本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野都市計画事業筑紫駅西口土地区画整理事業に伴 う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.現地における発掘調査は、平成 11 年度に行った。調査地は筑紫野市大字若江 37 番 1 外 9 筆で、調査実施面積は 6,789 ㎡である。
- 3. 本件に係る各担当者は、以下のとおりである。

事前協議文化財課 文化財担当 技師渡邊和子発掘調査"小鹿野亮整理報告"小鹿野亮

- 4.発掘調査に係る遺構測量は、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。なお、個別の遺構測量は小鹿野が行った。
- 5.本書に掲載した遺構写真撮影は小鹿野が行い、全景写真はフォトハウス OKA に委託した。
- 6.本書に掲載した遺物実測ならびに図版トレースは小鹿野が行った。
- 7.調査によって得られた資料および図版などは、筑紫野市教育委員会が保管している。
- 8. 本書の編集ならびに執筆は小鹿野が行った。

凡例

- 1.本書の構成は、遺構種別ごとに昇順で配列している。なお、文章中で表現される個別遺構の表記は、以下のとおりとした。
 - (例)若江天神社前遺跡第 次調査において検出したS が、整理の結果「井戸」と判断された場合。

若天前 S E

(遺跡名) (調査次数) (遺構種別) (遺構番号)

- 2.遺物番号については、個体番号をアラビア数字(丸数字)で記述した。挿図(Fig.)と図版(PL.) の遺物番号は同一である。
- 3.本書で使用される遺構の略号は、以下のとおりである。

略号/種別/備考

- SD/溝/自然流路を含む。
- SFノ道路ノ側溝を伴う場合は、両側溝の内法の空間を示す。
- 4.本書に使用した方位および座標値は、国土調査法第 座標系を基準としている。従って図中の 方位は特に注記のない限り座標北 (G.N.) を示している。
- 5.遺構の図化データは、トータルステーションを用いて採取したデータから3次元モデルを作成し、DXF.フォーマット形式で保管している。
- 6.本書に掲載される遺物の分類等については、次の文献を参考にした。
 - ・横田賢次郎・森田勉 (1978)「大宰府出土の輸入陶磁器の分類について」『九州歴史資料館研究 論集』4
 - ・太宰府市教育委員会(1983)「付編 土器の分類」『大宰府条坊跡 』
 - ·太宰府市教育委員会 (2000)『大宰府条坊跡 陶磁器分類編 』
- 7.本書中で示す土層や遺物の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帳(Revised Standard Soil Coler Charts)』を基準とした。色情報については感覚差があるため厳密に分類した訳ではないが、参考までに併記した。

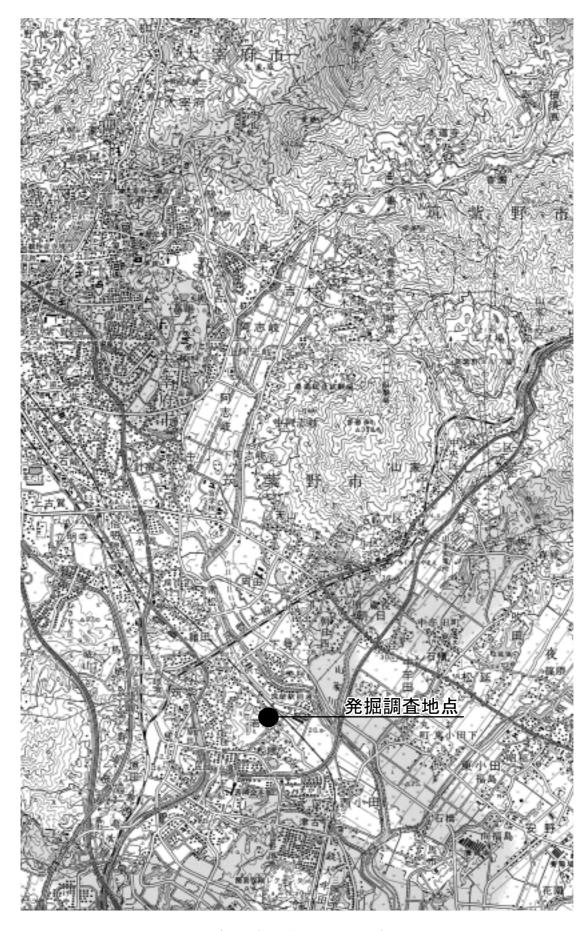


Fig. 1 発掘調査地点位置図 (1/50,000)

. 調査に至る経過

福岡都市圏の南部に位置する筑紫野市は、博多の奥座敷である二日市温泉街や近隣市町村を商圏域とする商店街を形成し、周辺の森林田園地帯と共存した閑静な街として推移してきた。しかし、昭和40年代以降の自動車社会の到来と交通網の整備と相まって福岡市のベットタウンとしての脚光をあび、近年では小郡・筑紫野ニュータウン建設や土地区画整理事業のような大規模開発がいたるところで展開され、急速に住宅都市として変貌しつつある。若江地区は、平成9年度に「筑紫野都市計画事業筑紫駅西口土地区画整理事業」の事業認可を受け、本格的に事業に着手している。

筑紫野市教育委員会では、それに先だって平成4年9月、当該地区の文化財的遺産の所在を把握し、文化財保護方針の策定および基本計画案の作成の検討資料とすることを目的として「文化財的遺産等現地予備調査」実施した。調査内容は現地踏査および聞き取り調査とし、一般参加者9名の援助を受け、祠等の祭神名・いわれ・祭開始年・所有者および祭神者、植生(樹種、樹齢、所有者)について124件を確認した。

その後、市教育委員会としては、事業地内には2ヶ所(現3ヶ所)の埋蔵文化財包蔵地が 所在しており、また土地区画整理事業が面的整備であるという特性から、事業地内の文化 財の保全を前提とした協議を筑紫野市区画整理課と行った。この結果、平成10年3月2日 に「筑紫野都市計画事業筑紫駅西口土地区画整理事業地内文化財に関する覚書」を締結し、 当該事業地内における文化財の保護措置を随時実施することとなった。

市教育委員会は、工事の実施に先行して平成10年度から事業地内の試掘調査を行い、単年度ごとの工事予定箇所について埋蔵文化財の所在状況を随時確認している。今日までの各年度ごとの試掘調査箇所一覧はTab.1に示すとおりである。

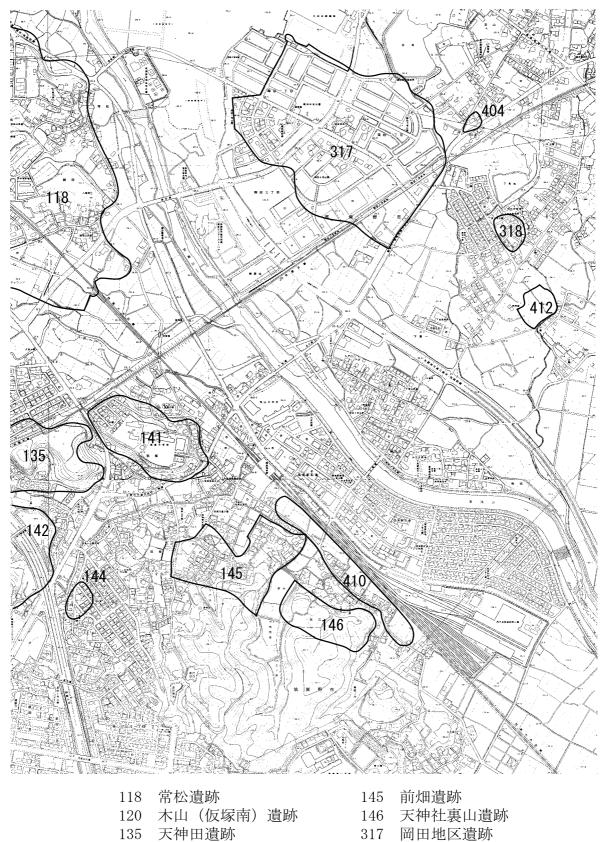
Tab.1 試掘実施面積一覧(年度每)

平成 10 年度 33,468 ㎡ (試掘トレンチ 83 箇所) 平成 11 年度 5,442 ㎡ (試掘トレンチ 25 箇所) 平成 12 年度 1,120 ㎡ (試掘トレンチ 13 箇所) 平成 13 年度 255 ㎡ (試掘トレンチ 21 箇所) 平成 14 年度 23,429 ㎡ (試掘トレンチ 32 箇所) 計 59.800 ㎡ 計 174 箇所)

当該発掘調査対象区についての試掘調査は、平成11年1月14~20日に実施した。この結果、筑紫野市大字若江37番1外9筆(6,789㎡)の範囲には、現地表面より・20~30cmの深さで遺構が所在していることが確認された。確認遺構は溝・ピット等である。試掘調査の所見では、出土遺物が僅少であったため遺構の時期は明確にし得なかったが、検出された溝は一定の幅を保ちながら連続して東西に延びていることが確認された。

市教育委員会は、ただちに確認・試掘調査結果報告を福岡県教育委員会に行い、若江天神社前遺跡(170410)として台帳に登録された。その旨を平成11年1月28日付けで筑紫野市区画整理課に回答し、併せて事業の実施にあたっては文化財保護上の措置をとるように協議を行った。

平成 11 年度事業については、平成 11 年 4 月 1 日に「筑紫野市筑紫駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査平成 11 年度事務委任協議書」を締結し、現地における発掘調査



118常松遺跡145前畑遺跡120木山(仮塚南)遺跡146天神社裏山遺跡135天神田遺跡317岡田地区遺跡141筑紫氏居館跡318下ノ原遺跡142以来尺遺跡404花牟田遺跡144栗木遺跡410若江天神社前遺跡412狐塚遺跡各番号先頭につく170 は省略した。

Fig.2 **発掘調査地点周辺図 (**1/10,000)

は、平成 11 年 5 月 26 日より行った。調査実施面積は約 6,789 ㎡で、排土置き場の確保が困難であったために、調査対象区を便宜的に ~ 区と区切り (Fig.3) 隣接する ・ 区より発掘調査を開始した。同年 10 月 29 日で調査を完了した。

. **位置と環境 (** Fig.1,2 **)**

若江天神社前遺跡は筑紫野市大字若江地内にあり、西鉄大牟田線筑紫駅の南側、若江天神社の北側に位置する。若江地区の地形は、東西に細長い平地部と南方から櫛状に短く延びる丘陵部に分れている。高位に位置する丘陵地形には阿蘇4火砕流堆積物(Aso-4)が厚く堆積し、丘陵の末端は河川の侵食による侵食崖が発達しており、下位に続く沖積地形との比高差は5m以上ある。若江地区北方に広がる沖積段丘面については、主に北側を東流する宝満川の氾濫および開析により砂礫層および泥質土が厚く堆積し、周辺の地形は水生堆積の状況を示し湿地状を呈する。これら丘陵地形から沖積地形に変化していく付近には、シルト質の安定地盤が広がっており、遺跡は水生堆積に起源をもつ地盤上に立地している。

若江地区においては、天神社裏山遺跡、若江天神社前遺跡、前畑遺跡等の埋蔵文化財包蔵地があるが、今日までに本格的な発掘調査が実施された事例はなく、特に土地区画整理事業地内の埋蔵文化財の所在状況には不明確な点が多い。このため、今回の調査で検出された道路跡についても積極的に性格を論じることはできない。ただし、隣接地を通過する既存道路が通称「松崎街道」と呼ばれており、東へ向かう主要道路であることから現在でも小郡市方面への通行は多い。この道はそのまま東に向かうと筑紫野市隈を抜け、宝満川左岸の同市西小田付近で江戸時代の薩摩街道に接続されている。また、事業地の周辺域では、古代官道(西海道)と官衙が発見された岡田地区遺跡を始め、筑紫氏の館跡と推定される矢倉遺跡周辺の中世遺跡等、古代から中世にかけての遺跡が所在している。

参考文献

- ·筑紫野市教育委員会(1982)『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第8集
- ·筑紫野市教育委員会(1985)『西小田地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第11集
- ·筑紫野市教育委員会(1996)『岡田地区遺跡 東遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第51集
- ·筑紫野市教育委員会 (1998)『岡田地区遺跡 · 』筑紫野市文化財調査報告書第 56 集
- ・筑紫野市(1999)『筑紫野市史』上巻 自然環境 原始・古代 中世

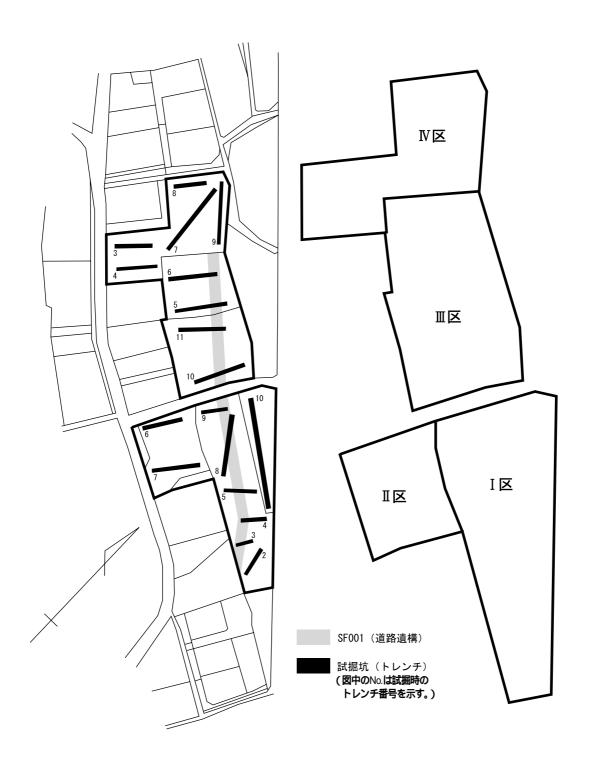
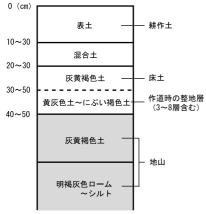


Fig.3 試掘坑 (トレンチ) および調査区配置図

.調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、12世紀後半を下限とする道路遺構(約150 m)である。 舌状に延びる丘陵部の北側を東西に延びており、緩やかに蛇行しながらもほぼ直線的に延 びる。出土遺物は、須恵器片、龍泉窯系青磁片、同安窯系青磁片等があるがいずれも小片 であり、図示できるものは微量である。



※深度は一定でないため、数値は参考までに表記した。

Fig.4 基本土層模式図

調査区周辺の基本層序については Fig.4 に示した。遺構 検出面は、現況 G.L. - 30 ~ 50cm の深さにあり、耕作土下 にある床土直下で検出されている。比較的浅いレベルにあ るために著しい削平を受けており、遺構の遺存状況は悪 い。遺構検出面は八女ロームが基本で、北方に向かって漸 移的に沖積地形に移行するためか部分的にシルト化した箇 所も見られる。道路跡 (SF001) については、路体を形成 する整地層 (後述する痕跡 B-3 類) があり、遺構検出面と は同一のレベルである。

SD001 (Fig.5 • 12, PL.1 ~ 3)

道路跡 (SF001) の北側溝である。SD002 と並行しており、道路側溝として掘削されたものと考えられる。検出距

離は約150 mで、上幅 $0.9 \sim 1.3 \text{ m}$ 、下幅 $0.3 \sim 0.9 \text{ m}$ 、深さ約0.3 mを測り、断面形状は逆台形(一部ラッパ状)を呈する。緩やかに蛇行しながらもほぼ直線的に延びる。溝の埋土は基本的に非常に締まりのよい混合土の単一層で、掘り直し等の痕跡は確認されていない。主体となるのは15 M (Fig.7) である。遺物の出土が僅少であるため、開削・埋没時期については不明確である。

また、SD001 床面には一定間隔でピットが並んで検出されている(Fig.12) 杭が穿たれた部分と柱穴状に埋設された部分と若干の工法差が見受けられるものの、柵状の施設が設置されたものと考えられる。このピット列のプランは基本的に側溝埋土を除却した時点で確認されており、溝との機能・構造上の関係が今一つ不明確ではあるが、柵設置時には側溝は開渠であったものと考えられる。杭列は構造上(径が)2種類あり、途中、杭状の箇所から掘り方を持つピットに変化する箇所があるが、その成因については不明である。杭間の距離については、杭状のもので平均80.4 cm (31.37 m /39 区間) 掘り方を持つもので平均79.6 cm (24.68 m /31 区間) 全ての平均値で80 cmを測り、計測値から見てもほぼ一定間隔で56 mの距離にわたって設けられていることがわかる。

SD001 出土遺物 (Fig.6、PL.9)

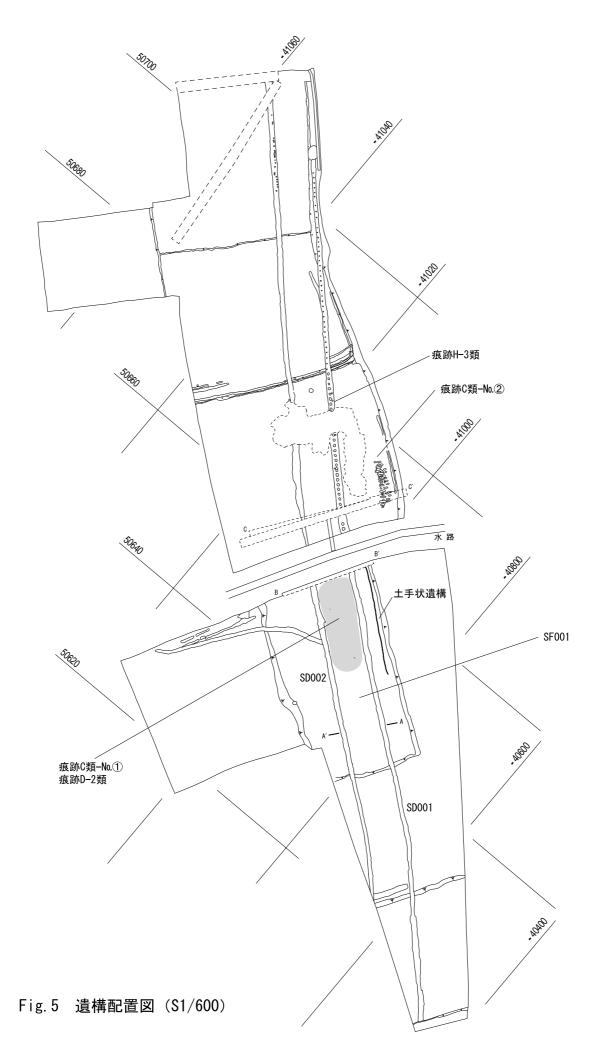
龍泉窯系青磁()

碗 類 鎬蓮弁文碗の口縁部~体部の破片である。体部外面に弱い鎬蓮弁が配される碗 -b 類で、蓮弁の形状は歪んでおりやや稚拙である。残存高1.7 cmを測る。釉は光沢がある 青緑色に発色し、均一に施釉されている。胎土は灰色を呈し、不純物は微量である。

同安窯系青磁(・)

皿 類 底部の破片である。残存高 1.1 cmを測る。内面にヘラによる文様とジグザグ状の櫛点描文を施す。釉は濃緑色を呈し、均一に施釉される。胎土は灰色で、不純物は含まない。

碗 類 底部~体部下位の破片である。高台径2.5cm、残存高5.5cmを測る。高台はしっかりとした造りのもので、外方に八の字状に開く。釉は光沢を持った薄い黄緑色を呈し、内面と体部外面下位まで施される。胎土は精緻であり、灰白色を呈する。体部外面には縦櫛文、内面には櫛点描文とへラ描きが施されている。器形・施文については同安窯系青磁(-1b類)の特徴を示すが、ケズリ調整は概して粗く段が残っており、良品とは言えない。



- 7 -

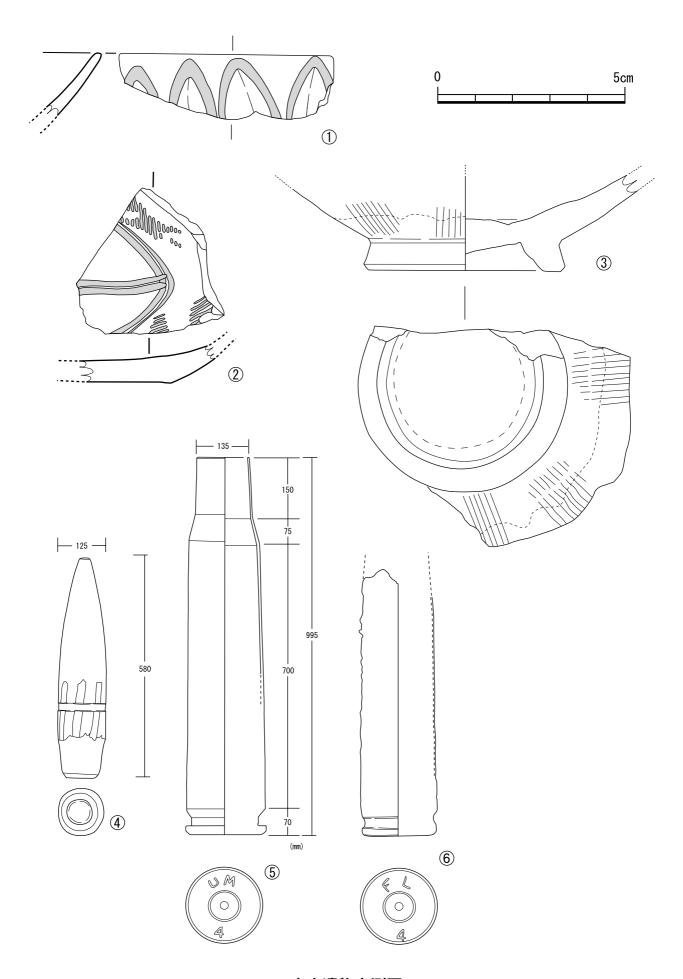


Fig.6 出土遺物実測図 (1/1)

-	9	-
---	---	---

弾丸()

は、12.7 mm弾の弾丸である。出土位置から判断して ・ の薬莢とセットになるものと考えられる。径1.25 cm(実寸) 長さ5.80 cmを測り、弾身部に8箇所の線状痕が残っている。薬莢(・・)

埋土の掘削中に出土した資料のなかに薬莢がある。 は全長 9.95 cm、口径 1.35 cm、薬莢部最大径 2.1 cm、底径 2.15 cmを測る。真鍮製のもので、雷管部に UM4()とFL4()というアルファベットの刻印がある。 は破損しているが と同等のもので、残存長 6.8 cmを測る。口径から 12.7 mm機銃弾の薬莢であると思われる(準)。

註1 太平洋戦争末期の昭和20(1945)年、「筑紫駅機銃掃射事件」で米軍機に搭載された機銃の薬莢である可能性が高い。当時の筑紫駅駅舎は現在の駅舎よりやや西側にあった。数回の襲撃があったとの証言があるが、調査地点は旧駅舎の東側にあり東西方向に米軍機の進路がとられたことがわかる。襲来したのは5~6機の陸軍P51とグラマン艦載機(機種には異説あり。A20八ボック、A26インベーダー、P47リパブリック105サンダーバードの説もある。)の混成隊であった。当時、九州上陸を目指す米軍の「オリンピック作戦」により、当市に近い大刀洗町飛行場への爆撃も本格化していた。夜須町に大刀洗飛行場が臨時に建設され、筑紫野市馬市との境には航空機格納用の掩体壕が数ヶ所に設置された。こうした軍事施設の破壊を狙って米軍機の襲来が頻繁になり、8月8日に事件が起こった。当時の米軍戦闘機に搭載された機銃は12.7mm弾が一般的なもので、その発射初速は893 m/秒であったとされている。

参考文献

- ・岩堂憲人 (1973) 「機関銃編」『世界兵器図鑑 アメリカ編』 国際出版
- ・筑紫野市 (1999)「第5編近現代・3村と戦争 米軍機の"筑紫駅襲撃"事件」『筑紫野市史・下巻近世・近現代』

SD002 (Fig.5,PL.1.3)

道路跡(SF001)の南側溝である。SD001と並行しており、検出距離は約130 m、上幅0.5 ~ 0.7 m、下幅0.2 ~ 0.4 mを測り、断面形状は逆台形を呈する。遺物の出土がないため開削・埋没時期については不明確である。SD001 よりやや小規模であるが、埋土が同一であり主軸方向が一致していることから、同時期の所産と考えている。溝の埋土は基本的に単一層であり、掘り直し等の痕跡は確認されていない。主体となるのは15層(Fig.7)でSD001と同様である。

SF001 (Fig.5 • 7,PL.1•7)

SD001とSD002の両側溝に挟まれた遺構である。基本的に遺物が少ないため、2条の溝のみで道路跡として認定してよいか苦慮したが、両溝とも同一埋土であること、約150m区間直線的に検出されていること、古代官道等によく見られる道路痕跡が路面部より検出されていることから道路跡と認識して調査を進めた。

道路跡の主軸方向は N - 43 ° ~ 51 ° - W に採り、日野尚志氏の復元による条里地割り (日野 1979)に斜めにアクセスする状況である。

幅員は側溝の芯心間で6m幅を測る。削平が著しいため、基本的には路面もカットされているものと考えられる。帰属年代については、上限は古代にまで遡る可能性はあるが現在のところは明らかにはできず、下限は龍泉窯系青磁 類椀片、同安窯系青磁碗 類・皿が出土していることから貿易陶磁 D 期 (12世紀中頃~12世紀後半)と推測するに留まる。さらに、どういう性格の道路で、どこの管理下にあったのか、そして何と何を結ぶ道路なのか、今後の検討課題である。また、SD001 の床面に所在する柵列は、道路の南側に位置する若江天神社を中心として展開されており、区画機能を想定した場合には神社周辺には拠点的な施設の存在が想定される。

なお、路面観察による道路痕跡の詳細については、後述する(・ 考察 2. 道路跡に残された痕跡に関する諸問題;本書 11 ~ 20 頁)。

参考文献

・日野尚志 (1979) 「筑後国御井 (筑後川左岸)・三潴二郡の条里について」 『佐賀大学研究論文集』 27

. 考察

1. 道路跡に残された痕跡に関する諸問題

従来の道路調査については、道路に残された痕跡に関する性格推定論のみが先行しており、それらの属性分析やそれに基づく比較検討、性格を推定する根拠の明確化がなされていない現状がある。本遺跡においては、道路遺構の検出に伴って各種痕跡が確認されている。性格については明確にし得ない部分も多いが、一定度それぞれの検討内容を詳述しておきたい。種別としては、痕跡 B-3 類(区)痕跡 C類(区、区)痕跡 D-2 類(区)痕跡 E 類(区)痕跡 H-3 類(区)の5種の痕跡が検出されている。なお、この痕跡の分類については小鹿野 2001:2003b によるほか、文末にその概略を記している。

痕跡 B-3 類の検討(区)(Fig.7、PL.7)

区において、路体盛土部の構成土壌に粘質土と砂質土を用い、それらが互層をなしている状況が確認されている。この現象は基本的に側溝外では確認されず、路体(路面部および路側部)のみに見られたことから路体施工に伴う整地痕跡(痕跡B-3類)と理解している。これはいわゆる盛土工法(山村信榮1993)に当たるものである。異種土壌を交互に積み土する行為は、水城や大野城の版築工法でも確認されており(九州歴史資料館2001)層同士の抵抗力を増大させる目的があった可能性がある。土壌中にはそれ以外の痕跡は確認されていないが、区と区は根本的に痕跡の在り方が異なっており、地形変化によるものかと考えられる。なお、今回の調査では横断トレンチによる土層確認しか行っていないため、積土行為の詳細については確認できなかった。

また、側溝は道路作道時の造作と見られる整地層(シルト~粘土層・痕跡B-3類)に切り込んでおり、時間的には後出する。このことは一連の作道のための基礎工事を前作業として行い、最終段階で側溝を敷設した可能性を示している。全ての道路痕跡を道路とは全く関係がないものとすればこの理解は成立しないが、層位とプランの状況からみて側溝を意識した状況が考えられることから、一連の作業痕跡(二次的なものも含む)と考えるのが妥当であろう。

痕跡 C 類 - の検討 (区)(Fig.8,PL.4)

一般的な痕跡 C 類が直線的な一軸の分布を示すのに対して、本痕跡の場合は面で分布しているため調査時には不可解な点が多かったが、その一つ一つの形状からとりあえず痕跡 C 類とした。検出状態に切り合いを持っている点から判断して枕木痕跡とは考えにくいが、単位(群)をなして存在しているのが特徴である。まず、それぞれの埋土(切り合い)にどのような特徴があるのかを検討するために、その分別を試みた。埋土の状況については、3 種類の土壌に分別できた。以下に示す。

埋土1 灰褐色砂質土 (5YR6/2) ベースに鈍い赤褐色土 (5YR5/4) 粒。炭化物、土器細片を含む。

埋土2 明赤褐色土(5YR5/6)ベースに褐灰色土(5YR6/1)の混合土。炭化物、土器細片を含み、マンガンの沈着痕が顕著。

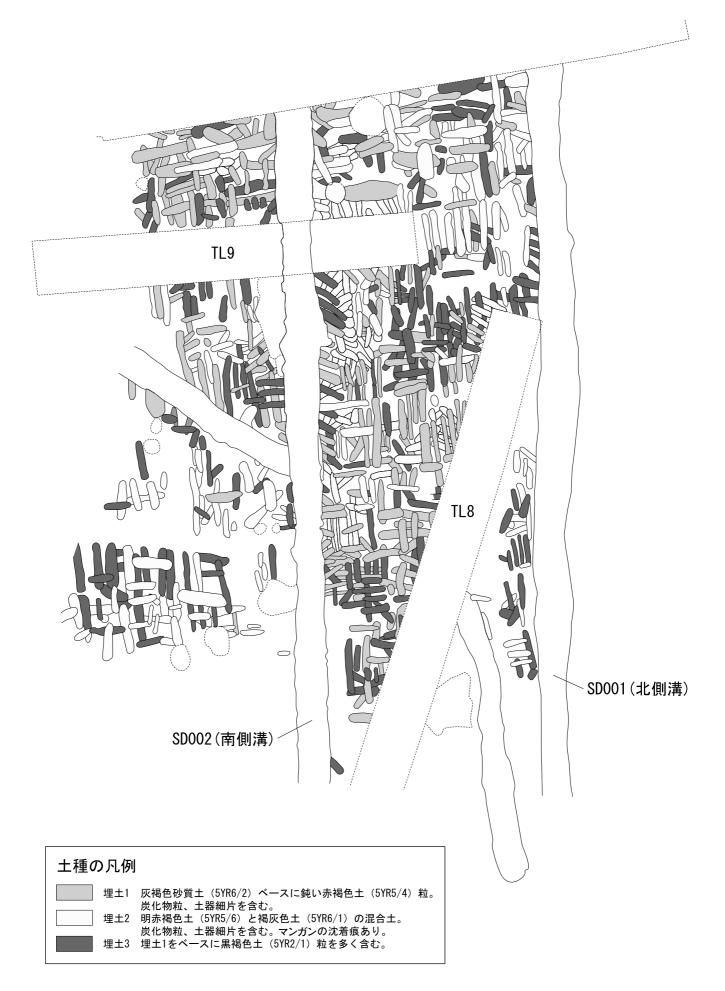


Fig.8 **痕跡** C 類 - 実測図および土種分別図 (1/100)

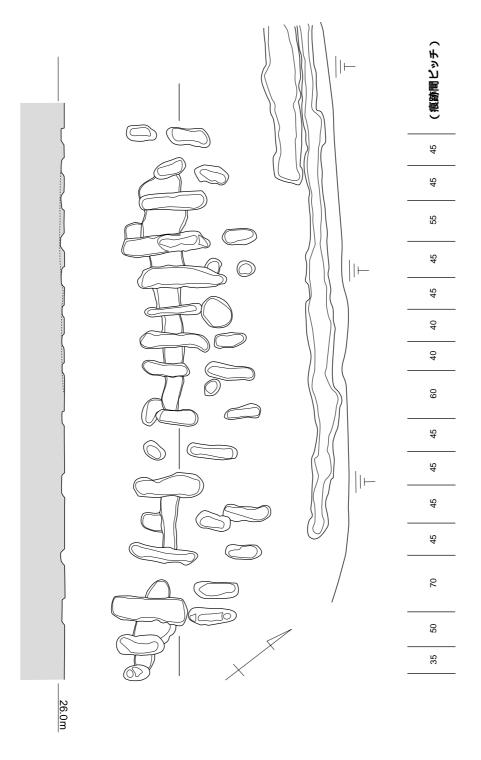


Fig.9 痕跡 C 類 - 実測図 (1/40)

埋土3 埋土1をベースに黒褐色土 (5YR2/1) 粒を多く含む。

結果としては、Fig.8 に示すように埋土による配置の規則性が見られないことから、複数の痕跡 C 類が群集している (弱規則群集型)(小鹿野 2003b)という想定は成立せず、従来の「波板状痕跡」の概念では整理がつかないということになった。ただし、明らかなのは自然に形成されたのものではなく人為的に作出されたものであるという点である。形状お

よび寸法には規則性が見られ、側溝周辺の痕跡は中央付近のものに比べてやや側溝の方へ傾斜しており、また、上位の整地層から切り込む痕跡はないこと等は道路との関係を示す所見として重要である。しかし、検出範囲が外側の路側部にまで広がっており、道路との関係性については積極的には論じ得ない。基礎地業の際の構築物を想定するのであれば単体の波板状に遺存する可能性が高いし、仮に道路に伴うものであったとしても波板状痕跡が厚さ5cm程の層中に複雑な切り合いを呈するのは、どうしても時間差を考えなければならなくなるために不自然であるものと考える。

痕跡 C 類は、道路の交差点や主要施設の周辺、地形変化点に多く見られ、連続して存在することが従来の傾向から見てとれる。部分的に単独で存在する場合もないとは言えないが、本調査地点例の場合なぜこの場所にこういった痕跡があるのか、積極的に説明をすることができない。

また、形状から想像できる痕跡の性格としては耕作痕跡(畝等)があるが、これについても積極的には論じ得ない。耕作痕跡とするには、痕跡の長径が短く、痕跡間ピッチが狭いように感じる。耕作痕跡の場合には、痕跡内埋土が旧畑面の耕作土壌で構成されるはずであり、本遺構の場合の痕跡検出面の上位と下位に見られない全く異種の土壌である点は不可解である。さらに、本調査地点ほど切り合いが複雑ではないが、岡田地区遺跡例の痕跡 C 類のように複数の交差状態で検出されるものもあることから、(波板状圧痕3[痕跡 C - 7 類]; 筑紫野市教育委員会1998 、耕作痕跡とは考えにくい。

痕跡内の埋土は、主として硬化土 + プロック土 + 遺物等の細片が主体に構成され、非常に締まった状態で検出されている。これは痕跡 C 類の埋土分類の埋土 (小鹿野2003b)と類似しており、この場合の痕跡の性格として二次的な補修痕跡と理解している痕跡 C-2類が該当する。この場合、道路部分とそれ以外の部分も含んだエリアに施工された(従来確認されていない)補修痕跡のパターンであるとも想像できるが、現在はその積極的な根拠に欠けている

考えられることをいたずらに列記したが、現段階では一定の結論には至らなかった。今 後の研究に期待したいと思う。

痕跡 C 類 - の検討(区)(Fig.9)

区の道路跡北側の段落ち際で検出された。検出距離6.65 m、一つの痕跡の長径約80cm、深さ約5cmを測る。痕跡は地山に切り込んでおり、埋土は灰褐色砂質土の単一層である。痕跡 C 類の分類では、分布形状は弱規則短距離型、長径は散発型、痕跡間ピッチはやや狭小型の傾向を示している。痕跡の下部には同一の埋土で幅20 m、深さ10 mの溝が直交方向にある。積極的に痕跡 C 類との関係を言及できる所見はないが、岡田地区遺跡で検出された痕跡 C 類 (波板状圧痕 4 [痕跡 C -2 類]; 筑紫野市教育委員会 1998)と類似している。岡田地区遺跡例の場合は、官道(西海道)の路面中央付近で検出され、平地と微高地との地形変化点で弱い切り通し状になっている箇所に所在しており、地盤補強の痕跡である可能性に言及した。本調査地点の事例は、遺構検出面(路体を形成する整地層)より一段落ちる際で検出されていることからこの所見を補強するものとも考えられるが、検出箇所の補強意図が明確ではなく、性格についての言及は控えておきたい。

また、検出位置についても道路外の段落ち際であることは、痕跡 C 類が必ずしも道路に伴うものだけではないことを示している。

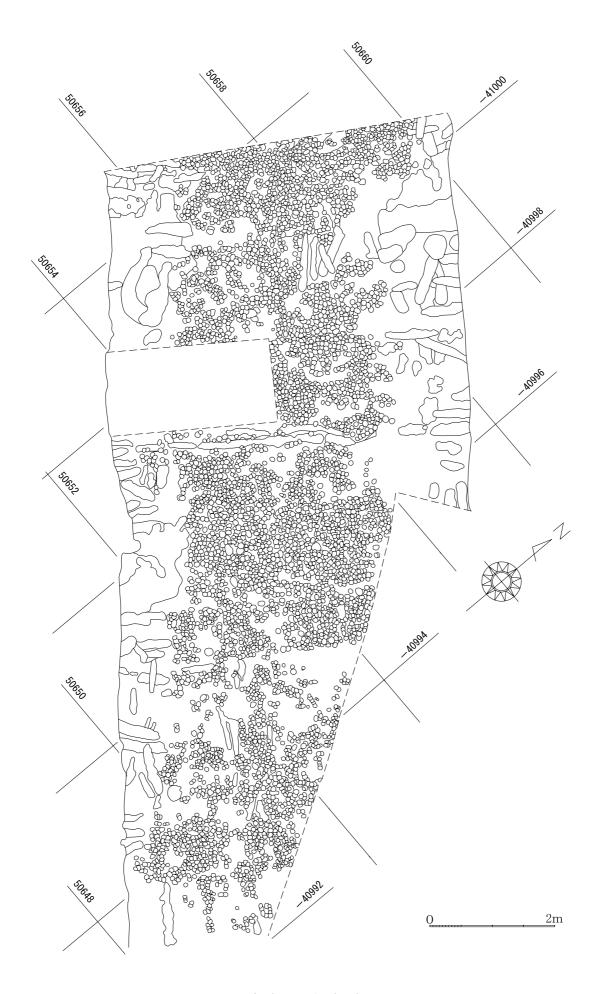


Fig.10 **痕跡** D-2 **類実測図 (**1/60)

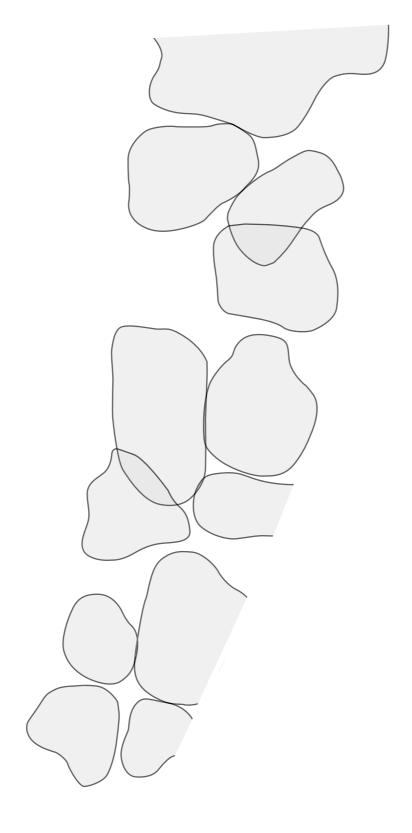


Fig.11 **痕跡** D-2 **類分布範囲抽出図(**1/60)

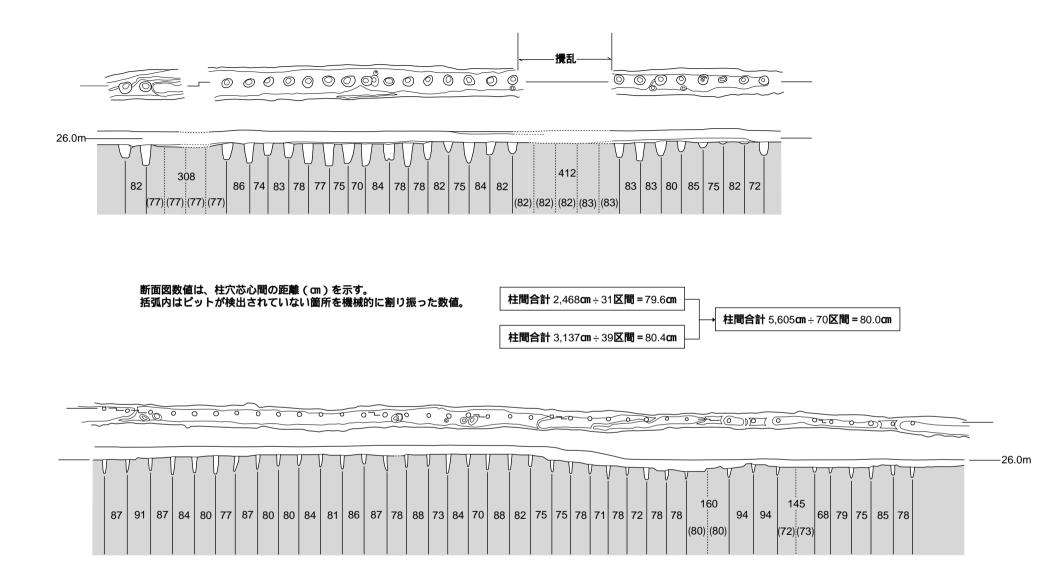


Fig.12 痕跡 H-3 類 (溝内杭列) 実測図 (1/140)

痕跡 D-2 類の検討(区)

(Fig.10 • 11,PL.5 • 6)

分布範囲は 区痕跡 C 類・と 完全には一致しないが、層位的には その下位に所在するものである。痕跡 C 類・とは異なり、分布範囲が 路面部および路肩部に限定され、また、道路の内外では地山の硬化度合が全く異なっているため、道路に伴う痕跡であると理解できる。道路部分は非常に硬く締まっており、乾燥すると薄く層状に剥離する。これは、

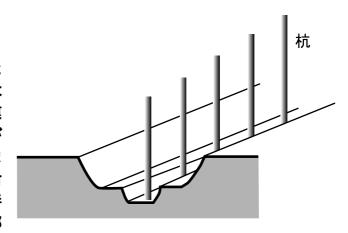


Fig.13 痕跡 H-3 類 (溝内杭列) 復元想定図

二次的な営力による加重を考慮したとしても不自然なのではないかと考える。また、道路側溝の外側では痕跡が確認されないことも道路と深く関与する痕跡である傍証となろう。

痕跡 D-2 類は、岡田地区遺跡(未記録、現認のみ;筑紫野市教育委員会 1998)や大宰府条坊跡第 200 次(筑紫野市教育委員会 2003)例と土種や構造の点で類似している。痕跡 C 類 + 痕跡 D 類 + 土塊単位の組み合わせに規則性が見いだせるのかどうかが今後の検討課題である。また、痕跡 D 類は群で存在しており、グルーピングが可能である。これは、作業工程上のプロック(単位)を示している可能性があり、人為的な作業痕跡と理解する根拠となる。本遺跡の場合は道路主軸方向に対して約 2.5 mスパンで単位が抽出できる。

痕跡 E 類の検討(区)(PL.6)

鋤・鍬等による掘削痕跡であると推測している。地山に鋭角に切り込む箇所が部分的に見られ、層位の逆転現象が起こっている。作道以前(別の時期)の耕作痕の可能性と作道時の地業痕の2つの可能性が想定されるが、本遺跡の痕跡 E 類は両側溝付近(路肩部)に偏って存在しており、道路作道時の地山レベル調整の所産である可能性が高い。

痕跡 H-3 類(道路側溝内の杭列)(区)(Fig.12.PL.1・2)

SD001 床面で検出されたピット列については、その設置目的が不可解である。単なる土留め工事の痕跡とは考えにくく、柵を想定した場合においても、道路の北側は緩やかに宝満川に向かって傾斜して徐々に湿地に至っており、そこに柵を設置する意図が理解できない。

主な柵の設置目的については、 区画機能、 護岸(路肩の保護) 防御機能等が考えられるが、区画するための何か施設を想定すれば立地的に道路の北側の湿地よりは南の丘陵側を考えるべきで、北側に杭列があることや道路から宅地への橋梁(簡易の通路)もないことから は考えにくい。 については、道路の設置工事時もしくは二次的な工事が考えられる。しかし、側溝は開渠であったと考えられるため、今のところ土留め等の機能は考えにくい。 については、その防御主体が不明確であるため、現段階では論じる材料がない。このように、杭列の性格については現段階では積極的に論じ得ないが、周辺域の調査データの追加に期待することとしたい。

土手状遺構と道路の関係(区)(Fig.5・7)

区北側溝の北約2.1 m (7尺)付近に道路に併走する土手状の膨らみが確認できる。その土手状遺構のさらに北側は、湿地との境界の段落ちに繋がっている。これは、痕跡 D 類、

痕跡 E 類の分布範囲と一致しており、これらが道路に深い関与があることを示しているものと考えられる。土層の観察では、土手状遺構の上(横)位に道路整地があることが確認されており、さらにその分布範囲、分布の軸方向が一致することを考えれば、それらは密接な関係にあることがわかる。土手状遺構と道路痕跡との関係は、他所では見られない。

区と 区の関係

区と 区では、層位から判断される所見が全く異なる。両区の土壌の共通項は地山(白~ 黄褐色の八女ロームで表面のみが固化)のみで、削平されている可能性もあるが、高所の 区は整地が幾度も重ねられているにも関わらず、低所の 区は1層のみしか確認されていない。 区の場合は、整地層 = 痕跡 C 類の検出層 (5 cm程度) となっている。

痕跡を比較してみると、 区は痕跡 B 類 + 痕跡 D 類 + 地山、 区は痕跡 B 類 + 痕跡 C 類 + 砂質土 + 痕跡 D 類 + 痕跡 E 類 + 地山となり、それぞれの性格づけは別としても工法の組み合わせが全く異なっている状況がある。この原因については、 区と 区の現在の境界には水路があるため追認はできないが、周囲の地形を確認してみると微高地と低地との境界付近に位置していることが考えられる。築造工法は地形変化に密接な影響を受けることが予測されるため、土地利用上の工法選択がこれらの差異となっているのではないかと考える。

参考文献

- ・山村信榮 (1993)「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号
- ·筑紫野市教育委員会 (1998)『岡田地区遺跡群 · 』筑紫野市文化財調査報告書第 58 集
- ・九州歴史資料館(2001)『大宰府史跡発掘調査報告書 ,平成 12 年度』
- ・小鹿野亮 (2001) 「古代の官道 筑紫野市域における調査 」 『筑紫野市史 資料編(上)考古資料』
- ・小鹿野亮 (2003a) 「朱雀大路の築造に関する問題」『大宰府条坊跡第200次発掘調査』筑紫野市文化財調査 報告書第75集
- ・小鹿野亮 (2003b)「古代道における路体施工の複合性 道路に残された痕跡の分別理解 」『九州考古学』 第78号

参考 道路痕跡の分類(小鹿野 2003b)

A 類 (硬化痕跡)

B 類 (整地痕跡)

- 1 (全体硬化)

- 1 (表層の化粧)

- 2(部分硬化)

- 2 (補修地業に伴う)

- a (一本の帯状)

- 3(路体施工に伴う)
- ア(太)メートル単位規模
- イ(細)2~30cm 規模
- b (2本が平行)

C類(波板状痕跡) 1

- 1 (半自然的形成:枕木痕跡)長楕円形、埋土種は を想定。
 - A (規則連続型) b (中型) ii (やや狭小型)
 - A (規則連続型) d (散発型) ii (やや狭小型)
- 2 (意図的施工1:補修痕跡) 長楕円形、埋土種は を想定。
 - A (規則連続型)
 - B (弱規則短距離型) d (散発型)
 - C (弱規則群集型) a (大型) iii (中型)
- 3 (意図的施工2:基礎地業)長楕円形、- 2類と判別が困難。埋土種は を想定。
- 4 (意図的施工3:階段状掘り込み)円形。
 - B (弱規則短距離型) b (中型)
 - C (弱規則群集型) b (中型)

- 5(自然形成:使用による凹凸)
- 6(掘られた穴)
- 7 (性格不明) 不整形プランを呈するもの。
- D類(凹凸痕跡)
 - 1 (部分施工)
 - a 痕跡 A-2a イ類とセットになるもの
 - b 痕跡 C-2 類とセットになるもの
 - 2(面的施工)
- E類(起耕痕跡) 鋤鍬等の掘削による、道路作道時の地山整形(レベル調整)痕跡。
- F 類 (轍等の通行痕跡) 歩行痕跡等も含み、何れかの時期の路面を把握できる可能性があるため重要。
- G 類 (軟弱化痕跡) 道路の使用に伴う自然的軟弱化痕跡
- H 類 (ピット等の付帯施設) 道路に直接的に関与するのか不明だが、施工上の造作の可能性あり。
 - 1 (路側部・路肩部に見られるもの) 土留め工法との指摘あり (山村 1993)。
 - 2(路体に埋没するもの)道路の築造に関連か。
 - 3 (側溝底面に見られるもの)道路との築造上の関与は不明確。
 - 1 痕跡 C 類分別属性
 - ・単体形状

円形 (痕跡径比[長径/短径]2以下)、長楕円形 (痕跡径比2以上)、不整形

- ・主軸のばらつきと連続性
 - A 規則連続型 (軸のブレが少なく、規則的に連続して並ぶもの)
 - B 弱規則短距離型(軸のブレは少ないが、分布距離が短いもの)
 - C 弱規則群集型 (上記 B 類が複数軸で群集するもの)
 - D 群集型(まとまりがなく群集するのみのもの)
- ・長径
 - a 大型 (1.2 m以上のもので構成される)
 - b 中型 (0.8 ~ 1.2 m前後が主体を占めるもの)
 - c 小型 (0.8 m以下のもので構成される)
 - d 散発型 (2~3つのピークがあり、規則性がないもの)
- ・短径は一律
- ・痕跡間ピッチ
 - i 狭小型 (0.3 m以下にピークがあるもの)
 - ii やや狭小型 (0.3 ~ 0.6 m前後にピークがあるもの)
- iii 中型 (0.6 ~ 0.8 m前後にピークがあるもの、0.7 m程度が最も多い)
- iv **幅広型 (**0.8 m以上にピークがあるもの)
- ∨ **任意型 (2~3つのピークがあり、規則性がないもの)**
- ・埋土種

混合土1(上層覆土と異質土壌で、小礫・土器細片を含むことがある。砂質土主体と粘質土主体の2種類がある。) 混合土2(薄い層がマーブル状堆積を示すもの。)

単一土 (締りのない軟弱土。上層覆土と同一か、それが一部に混入する。)

・小碟・土器細片の位置

ア埋土上位 (痕跡 C 類上位の化粧土壌が痕跡内部に沈み込んでいる可能性あり、補修痕跡か)

イ埋土下位(基礎地業による築造痕跡である可能性)

2. 道路跡の歴史的評価

筑紫野市域に分布する中世の遺跡は、古代のそれと比べてまだ少なく、その全容を論じる段階ではない。しかし、今回の調査区である若江周辺には西方に筑紫氏館跡と推定される矢倉遺跡周辺の遺跡、その北側には常松遺跡、東方には龍泉窯系青磁や同安窯系青磁などの貿易陶磁器 D 期の資料を豊富に保有する西小田地区遺跡など、数は少ないが特徴的な遺跡が展開している。

矢倉遺跡(筑紫野市教育委員会1982)は、筑紫野市大字筑紫に所在し、現在の筑紫小学校北側に位置する遺跡である。昭和50年に宅地造成に伴って発掘調査が実施された。貝原益軒の『筑前国続風土記』の記述には、「筑紫氏則当社の神司にして、始は社のほとりに居れり。筑紫村に宅址あり。」、筑紫村の項に「村の東の方に小高き山あり、是を城の腰といふ。筑紫氏筑紫社司たりし時住せし宅の跡なり。」とあり、現在の筑紫小学校の敷地がある丘陵上に「筑紫氏館跡」を推定している。この場所は、戦時中に軍の弾薬庫として利用された経過があり、遺跡の遺存している可能性は極めて低い。しかし、明治12(1879)年の小学校校舎建設時には大量の遺物が出土したとの証言もあり、また、このエリアの小字名は「矢倉」を始め、筑紫小学校周辺に「城の越」「大手門」「城屋敷」「裏門」などがあり、館跡と推定する根拠になっている。時期は貿易陶磁器で期にやや遡るが、1号土坑からは2個体の白磁碗が埋置した状況で出土している。口縁部に5ヶ所に輪花をもつ劃花文碗(・5類)と無文の白磁碗(・2類)である。

筑紫氏の出自については、北朝方の少弐氏一族から分かれたとする説、少弐氏の家臣から分かれたとする説、古代筑紫国造の系譜を引く豪族とする説など諸説がある。『筑紫宮縁起』および棟札に、享徳2(1453)年、筑紫能登守経門、筑紫左近将監俊門が寝殿を建立したとあり、その後裔の筑紫広門も同社司であったことから、15~16世紀にかけてこのエリアに割拠したことが知られている。筑紫広門は、宗像・原田・秋月氏と共に大友氏に対抗していたが、天正14(1586)年、大友方の高橋紹運と同盟を結んだため、島津・秋月氏から攻撃を受け敗退した。いずれにせよ、起源については不明確な点が多い。

常松遺跡(賀川光夫他 1970; 筑紫野市教育委員会 1997) は、永岡遺跡に接する弥生時代の集落・墓地の遺跡として知られているが、舌状に拡がる台地の北東隅に当たる第2次調査において、墳墓の可能性がある土坑が検出されている。遺構のほとんどが攪乱により残っていなかったが、SK3 は土坑墓の可能性がある。出土遺物には土師器皿 a・坏 a、白磁片、陶器四耳(双耳) 壷片、滑石製石鍋片があり、調査地の東方には三郎天神社が所在しており、周辺に拠点が存在していた可能性を物語っている。

また、近年共同住宅建設に伴って調査された永岡遺跡第4次調査(筑紫野市教育委員会 2002)においては、ST011から龍泉窯系青磁碗 - c類(または 類)が1点出土している。

牛島宮崎遺跡第1次調査(筑紫野市2001)は本調査地点からはやや距離が離れるが、宝満川西岸の段丘縁辺部に位置する遺跡で、平成11~12年に工場拡張・道路建設に伴い発掘調査が行われた。遺跡の南方は宝満川と山口川が合流し、また西方には宮地岳があり、交通上の好地に立地している。中世のものと考えられる遺構は、土壙墓1基(ST069)と木棺墓1基(ST161)である。ST069は、A調査区隅の段落ち付近で検出された。楕円形のプランをもち、長さ約1.25 m、幅約0.85 m、深さ約0.15 mを測る。非常に残りが悪く、周辺域はかなり削平を受けているものと推測される。墓壙内の北隅からは、龍泉窯系青磁碗(

- 4a 類)が1 点副葬されていた。ST161 は、B 調査区の中央部の北側隅で検出された。長

方形のプランをもち、掘り方は長さ2.05 m、幅0.73 m、深さ0.43 mである。墓壙内からは 釘が23 本出土しており、木棺の推定寸法は、長さ約1.8 m、幅約0.4 mと考えられる。副葬品としては、土師器小皿 a 5 点、坏 a 2 点、龍泉窯系青磁碗(- b 類)1 点がある。墓壙内にある石は、棺の崩壊後に崩れ落ちたものと考えられ、標石のようなものである可能性が考えられる。この上からは、土師器坏 a が2 点重なった状況で出土しており、供献品である可能性もある。

西小田地区遺跡(筑紫野市教育委員会 1985)は、昭和 58 ~ 59 年に圃場整備事業に伴って発掘調査された。掘立柱建物や井戸等の遺構が検出され、遺物も土師器を始め、黒色土器、瓦器、瓦質土器、滑石製石鍋や江南産白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、国内産陶器等の陶磁器も大量に出土している。遺構群としては釈然としないが、出土遺物に豊富な貿易陶磁器や陶器を持ち、拠点的な性格が強いものと考えられる。

岡田地区遺跡(筑紫野市教育委員会 1996:1998)は、古代西海道とその南北両側に四至二町の官衙が検出された交通関連遺跡であるが、その西海道の北側溝 SD001 の至近距離には、瓦器皿3点と白磁碗(- 1a類)を副葬した土坑墓が1 基検出されている。基本的に当該エリアにおける古代西海道の終焉をこの時期と考えており、貿易陶磁 C 期をその下限とするため、この時期を境にして古代のルートは断絶していると考えられる。今回の調査地点の道路跡は、現在のデータではそれに後出する可能性が高いが、主要ルートが南に移っていたとしても時間的に整合する。現段階では、「12世紀後半を下限とする道路跡」と解しておくことに留めたいが、本遺跡の遺跡跡は、周辺を含んだゾーンの古代末から中世前期における動的な状況を示しているものと考えられる。

参考文献

- ·賀川光夫他(1970)『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』別府大学文学部史学科考古学研究報告書 1
- ·筑紫野市教育委員会(1982)『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第8集
- ・筑紫野市立歴史民俗資料館(1984)『ふるさと筑紫野』
- ·筑紫野市教育委員会(1985)『西小田地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第11集
- ·筑紫野市教育委員会(1986)『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集
- ・筑紫野市教育委員会(1996)『岡田地区遺跡群 東遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第56集
- ·筑紫野市教育委員会(1997)『常松遺跡第2次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第55集
- ·筑紫野市教育委員会 (1998)『岡田地区遺跡群 · 』筑紫野市文化財調査報告書第58集
- ·筑紫野市(2001)「牛島宮崎遺跡」『筑紫野市史 資料編(上)考古資料』
- ·筑紫野市教育委員会(2002)『永岡遺跡第4次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第73集
- ·筑紫野市教育委員会 (2003)『大宰府条坊跡第 200 次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 75 集

調査ならびに整理中には下記の方々にご指導ならびにご意見を賜りました。巻末ではありますが、記して謝意を表します(敬称略・順不同)。

山村信榮(太宰府市教育委員会)、小林勇作・上村英士(筑後市教育委員会)、狭川真一((財)元興寺文化財研究所)、石井扶美子(夜須町教育委員会)、宮田浩之(小郡市役所)、松尾直子・城野一郎(㈱埋蔵文化財サポートシステム)

写真図版 (PLATES)

PL.1





SD001 (北側溝)と痕跡 H-3 類 (溝内杭列)





SD001 (北側溝)土層



SD002 (南側溝)土層



痕跡 C 類 -



痕跡 C 類 - 検出土壌



痕跡 D-2 類 (凹凸痕跡) 検出作業

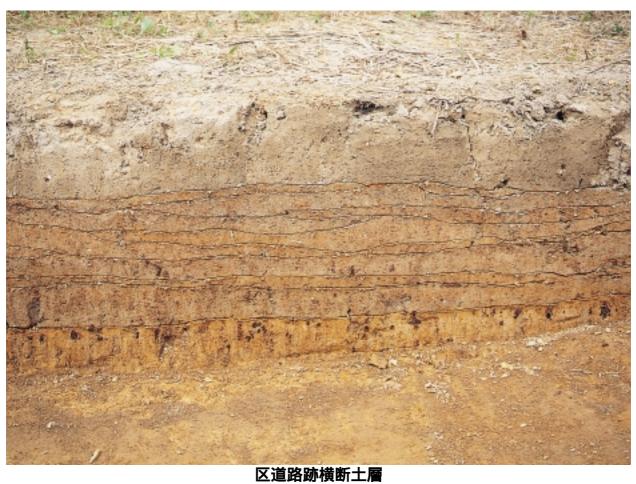




痕跡 D-2 類(凹凸痕跡)検出状況[掘削後]













報告書抄録

フリガナ	ナ ワカエテンジンシャマエイセキ										
書名	若江天神社	若江天神社前遺跡									
副書名	筑紫駅西口土地区画整理事業に伴う発掘調査1										
巻 次											
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書										
シリーズ番号 第78集											
編集者名	名 小鹿野 亮										
編集機関	筑紫野市教	筑紫野市教育委員会(教育部 文化財課 文化財担当)									
所 在 地	₹818-8686	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号 Tel. 092-923-1111									
発行年月日	平成16年 3月31日										
フリガナ 所収遺跡名	所 在 地	コ - 市町村	ー ド 遺跡番号	北緯(°′″)	東経 (°′″)	調査期間	面積 (m²)	調査原因			
若江天 神社前 遺跡	福岡県 筑紫野市大字 若江37番1 外9筆	402176	170410	33° 27′ 39″	130° 33′ 19″	19990526 ~ 19991029	6,789	土地区画整理事業			
種別	主な時代	主な	遺構	主な	遺物	特記事項					
古道跡	中世	道路	1条	龍泉窯系 同安窯系 銃弾・3	系青磁						

若江天神社前遺跡

筑紫駅西口土地区画整理事業 に伴う発掘調査1 筑紫野市文化財調査報告書 第78集 平成16年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会

福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号

印刷 秀英社印刷株式会社

福岡県筑紫野市武蔵三丁目2番6号